



七柏集
十一



5
2237
2



利5
2.237
卷2



御書吟の意向を云ふは
松橋の良作の作ありて
むし其國よりゆきし
やも花の



蓼太

心と川海は海を酒海と
しふふふふふふふふ
牛子行舟間を舟木ひやそ
橋子柄抄の醉以舟之
整結く浦人接ふ海舟織
全大 全

二百八二

夢の浦に映る夕陽の夕晴
天公の玉の露もあまたなく
子あまも衣も人後何まな
集りて輝きも妻も心かき
あつり傳と後此の世の中
常時之鎌倉一より一と道
天を揺るがぬ朝のよの指
ひきりひきり一握の世を
貫 全 太 貫 太 貫 太 貫 全 貫

及ねもあはく病の世風
川風も難波の波ゆめなり
日傘て赤り医者の世を
くかりの月花も人も何
花も花も海も地も友も
赤糸供も月花も衣被
何の葉もも十も世も舞
文字も世も清土も世も
貫 全 太 貫 太 貫 太 貫 全 貫

十四

二

香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其
 香のよも形も寸雲雪抱て其

貫 太 貫 太 貫 太 貫 太 貫 太

花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其
 花火のよも形も寸雲雪抱て其

全 貫 太 貫 太 貫 太 貫 太 貫 太

山崎

雪文窓真行

蓼太

輪まわや船ありて香貫をくさる
 夏をしのぎての月入る櫛
 ちかちか雪の降る下の方のちかちか
 おもひにぬきや詠のうたを
 空さのこころ公好り照るま
 玉屑のふりかたを割る
 賀 全 太 全 逸 賀

瓦葺きの屋敷の建まらり
 細いこもりの包をくさる
 使者推してゆく山をくさる
 雪のふりかたをくさる
 晴のこもりの雪をくさる
 群は一人の橋をくさる
 ちかちか雪の降る下の方のちかちか
 小使のちかちか雪の降る
 賀 太 賀 太 賀 太 賀

石破瀟々月のひらも荒鹿
 き然と多少の志を
 皇徳の御氣の川よと
 此河をふと石化入る智
 同りたあ青粒飯のふ如臧
 車鹿一言中御りも
 白き〜碧きをさるる意の
 何れをのりて年一原

大賀 大賀 全 大賀 大賀

古舟と海のむ老孔氣越け
 高乃也ふ〜番の岩草
 上町八知をよる城に月
 生流るる通ん減立入也
 肝葉は抱え〜馬の二幅射
 峰喰〜さるる意を〜法むき
 矢とぬ〜出り物喉をけの
 荷身積任ぬ〜けま〜入船

大賀 大賀 大賀 大賀 大賀 大賀 大賀

夕晴の程のくつき日和山
 ふらふらまきつれ守れ一客
 ぬげのつらふ其程のくつき
 ばあまをまじくくつき味さる
 地もぬのそふまふく花の露
 けしきもぬめりも新入海川
 執筆

俳關真行

蓼太

人丸 巾のくつき守れまきつれ
 貫之 空の中をまきつれ守れ
 躬恒 いはれもぬめりも新入海川
 伊勢 ふらふらまきつれ守れ一客
 家持 ぬげのつらふ其程のくつき
 赤人 ばあまをまじくくつき味さる

業平^ウ 重臣の母を結ぶる親子なる事
 遍昭 か〜〜母 牛庭訓
 素性 結納もむかひに結ぶる事
 友則 對客も入る事さう内之
 猿丸大夫 権柄は小使利縁をさくさうり
 小町 如き〜〜江の島
 兼辨 月も結ぶる事あ〜母
 朝忠 人とも結ぶる事あ〜母

太 羅 下 羅 太 羅 太 羅

敦忠 秋をなむ〜〜事物縁結ぶ事
 高光 一〜〜石あ〜事
 公急 権現の山あ〜下〜事の後
 忠岑 侍もあ〜事〜〜去入縁持
 齋宮御⁺ 宝東入〜つ〜の結ぶる事
 頼基 理もあ〜事〜〜事
 敏行 結ぶる事〜〜事
 重之 風を〜〜事〜〜物思心事

太 羅 太 羅 全 太 羅 太

二百三

雪中菴真行

蓼太

出づる雨の音もさびしくも草料
 生かすもあられ牧の馬木戸
 城の石人坐も遠海帯を
 簾の丸を麻の所をさしり
 さふらふの世も風もほろの月
 さうの世も此世の世もさうの世

和水 全 太 全 水

粉もさびしくも石十をさり
 ささきもさびしくも後の友船
 城築石も海と地もさびしく
 片月の人の世もさびしく
 天より七博もさびしくも
 ことの世もさびしくも
 松と水もさびしくも
 雪も福もさびしくも

太 水 太 水 太 水 太 水

龍子釣鷹の影あけの心
世をれ親仁の徳もくなく
さかすも大匠の筆もあ
道あり指しおぼえの心ある
文学の杖の影くと若くは
癒すも叱る院乃門守
清見の山に峰の松あり吹雪を
糸糸川流るる水もあ

太水太全水太水太

素流の心とあはれあはれ
さかすも大匠の筆もあ
猶津波の影を思ふ心
若くは松の影もあ
和の心もあはれあはれ
さかすも大匠の筆もあ
さかすも大匠の筆もあ
結衣の影もあはれあはれ

太水太水太水太水

1150111

江戸もあはれ子とてはなれぬとて
 行の勝はさふにいでて
 庭割の河舟とてさるるも
 五作舟とてさるるも
 六七里持くもたふさふ
 みより縮一柳とて枝

太水 全水 太水 太水 太水

芭蕉菴真行

戸出ても入眉は家おぼろ
 家新法所とて埋火
 奇何くぬ松領さるの松
 一水舟とて縮つるも
 夕月子獲の鞍あるも
 尚もさると多しとて

太水 全水 太水 全水 太水

何れが中酒を無事の
 毛糸〜幕の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 大津〜中酒の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 雑巾〜毛糸を無事の
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を

太
 太
 太
 太
 太
 太
 太

毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を
 毛糸を無事の毛糸を

太
 太
 太
 太
 太
 太
 太

初集初集

114121

1141

芭蕉菴與行

蓼太

吹上る河をゆく千尋の

流

平舟の舟をゆく松の冬枯 春江

舟をゆく海をゆく 朱汁

舟をゆく山をゆく 山奴

更なる舟をゆく 江

舟をゆく 汁

姉おのこはなまはる秋の

舟をゆく 太

舟をゆく 汁

舟をゆく 江

舟をゆく 太

舟をゆく 奴

舟をゆく 江

舟をゆく 汁

十四

十四

おしぬきまじりて子奴
 日孫六月と瓜の如き色
 何れも方角すく吹く
 眼よお知りあるは流石と山
 内合人の視を花く花の夜
 危く母まじりて子奴

汁奴 江太 汁奴

雪瓜園真行

君の代々二る十の物
 小家の門も八束穂乃月
 へ毛吹巻の如く見ゆ
 何れもやまに
 何れもやまに
 何れもやまに

蓼太

雪瓜 真文 大

お深舟小家もつとるる屋親子
脛を海くると然めつとるる
川もあめあの中のと古羅葡
約り船も思ひく度庭
いとあつと登舞は月文て
賀もつとあつり七十の秋
裁縫も是利際乃下もつと
つとつとつと楕の泥拭くや子

瓜 文 太 文 瓜 太 文 瓜

辻書もつとあつと西日け
甲子もあつとつと合も貸もつと
鯨もあつとつとつと年張飯
新日毎は神楽かきさん
お領の覺つとつとつと花入箱
柳さつとつとつとつと物此とつと好

文 瓜 太 文 文 執筆

老鶯巢真行

蓼太

懐き川都は流き茂の年
 心と汗心く暗く松蔭
 葉子葉入平草とくは揺めく
 およよ竹木入くくやんさ
 月くくおお千のふ袖おとりの道
 冬をく水くくくはれく
 太 良 祗川 七構 何さ
 太 良 祗川 七構

雲物入移あさる
 不二えまはしとと冠るく
 さぬくくくくくくくくくく
 夏くくくくくくくくくく
 押何くく人まきくく年のく
 波もるる熱の境よか
 岸海小鳥草とくくくく
 水あのかくくくくくく
 川 構 良 川 構 良 太 構 川

振向くま川る袖入帽子針
 院露尾仕舞字加指の四つら
 月の流ゆふ暮る多きんたま
 七川何しきす葉やるぬれん
 躑之申春入柱の川糸甜蝶
 兜片多申長の手如く
 葦の帆もまうし船やうし
 入院あうあうかしくふ入僧

川 太 良 樽 太 良 川 太 良 樽 太 良 樽

後心くね深る葉廣かいまを
 玉とあまむく蓮の孕句
 すまのしん神ハ院手照鏡
 多之のひる入帯ぬゆふ
 了りしうしなまけに星丸子
 扇板一把ふ水巻も鉢
 ねまのし切花の葉子も光の月
 空條如裸子と角力とる子家

川 太 良 樽 太 良 樽 太 良 樽 太 良 樽

^{ナリ}新海吐く紫鴉座の玉尊如
 弓と法まの時の色色
 建まこゝの海も如瘡孔赤帯
 とくくくくと白鴉大根
 何のそなた目的まさらの志ん
 流るるらん一橋の系ゆふ
 川太良構川良

芭蕉菴真行

まの舟中や氷乃くは松小舟
 鏡に河原月の色は山家
 花者の之陰うも子思ひ暮ふ
 いしをを袴袂のり多り
 追ふくまの夕暮をを傳あま進
 七多かあより一橋の入口
 蓼太
 朽木 梅雨
 青雨
 斗麦
 石菖
 太

囑託小十郎の傳る法衣書
 連も川僧の拵る多川
 後小川の針葉五六寸
 麻ふらぬはよ葉屋乃を相
 根を押ともしぬ伊勢の鬼衣を
 葉を止齒余り流川正月
 概中末社くもろの教
 高もろ負れ弱く流る白

梅 青 麦 葛 太 梅 麦 葛

四十とらげのこ子入むのき
 葉合書の水画いもあはれ
 福袋もねいぬりくまの書
 高屋もろのハ突葉衣を
 十 駕もろくも葉屋すも葉衣
 一 容もろくも葉衣もろくも
 葉衣もろくも葉衣もろくも
 葉衣もろくも葉衣もろくも

梅 青 葛 太 麦 梅 麦 葛

海客のこゝ男顔のこゝ左
 流沙の温のこゝ所中
 蕙のこゝ影のこゝ習の
 下結のこゝ縫の襦のこゝる
 初秋のこゝおのこゝる
 空を淋のこゝ片のこゝの月
 尿のこゝのこゝ禪のこゝ秋のこゝる
 小粒のこゝのこゝ相のこゝのこゝる

青 太 梅 麦 菖 青 太 菖

こゝの子のこゝ羊のこゝ美のこゝのこゝる
 碧のこゝのこゝをのこゝのこゝる
 鳥のこゝのこゝをのこゝのこゝる
 山阿のこゝのこゝのこゝる
 喜のこゝのこゝのこゝる
 こゝのこゝのこゝのこゝる

青 太 麦 松 太 青 執筆

芭蕉菴真行

蓼太

雪の音も冷き花を何
 嶽の田拂ふ葦の如く
 河へのつと麦湯ふか減まのせて
 三ふもまもも小太刀之分り
 月ひく懸号ちうま小矢敷
 梅を海くと教をけしめん

杉羽
 蘭秀
 水谷
 羽
 太

生同くも暮永の暮の袖ぬまき
 味淋耐ハと尾ふすも山守
 衣履と衣もく屏風を門まへ
 ま江く回も一室の毎糸
 舟もくも山走らぬる舎る事
 寐寝ちりしと油切りまひ
 谷汲の山風候か松の如く
 船もちりふる暗きハ

谷
 秀
 羽
 太
 秀
 羽
 谷
 太
 羽

鳩形をいししする程さし
 まるゝ中の中の日と輝を
 ちやうど葉廣の老也の松さし
 誰を啼くし葉入りの出
 檐まきまの骨は横をし
 中中赤三院乃たう海し
 無敵あまのの中を法を
 湯屋を建てるく園乃造化

+

秀 谷 羽 太

葉河の思をよくそは舟
 光をいしさ籐の夕く水
 席の輝を念も世らふ古鞍
 只是入修中老のね結し
 此等此二世も三層も人櫻
 松ふ志くし山入柳もあは
 月細く雲障連をふりあり
 あさくは解のまき呉娘もて

秀 谷 羽 太 秀 羽 谷 太

羽 今の
 太 素同
 谷 石使
 秀 舞臺
 太 傳
 谷 千景
 太 萬景

朱絃亭真行

蓼太

同 友の山里 群人
 撰集 破金 大橋
 白花
 太 人

五三十一能 餓鬼の籠る末を
 とし中さし一 神一の田の堂
 死のりひ言枝の餅入五和巾
 男世帯孔 徳き何く
 月代よさふ湯屋うう一手揃
 とや婿礼の門もさ女く
 紅井 女を女度とておもしろ
 老客の風をて海入女風
 花 橋 人 太 人 花 橋 人 太

うらまの月ひ輝の籠る末を
 とし古後とるいゆるささく
 暮初の側う書ふ月よさ
 まし其ささき 十徳の袖
 十
 臨河しとふも 幸あつてふ
 葉影を散らばるる源も舟縁香
 清世のゆに 実磯碇
 花 橋 人 花 橋 人 太 母

唯持るる六月夏の縁者如
刀さした夕影や所へん
賭物不氣根競るまゝか
舞能はるる生の月
曇る小巽まろり一秋を
い川への際後と吐さるま
五寸裁一尺裁を折心切
文集の如く唄浪遊は

人母太橋花人橋花

十ウ

と兄才
と川舟折心は折る心
危るる子衝と折は相火梅
あふく危るるあふの
津海橋の路へ余もよる
とよと入旅の城も甚る如

母太橋花人母橋

雪中庵真行

蓼太

様子を物い〜
 第うふふ衣の袖出羽 蓼雨
 行騰ハカ山阿ハ道の路ハあま 投茶
 河を屋一為破ハ花ハりり中 撰慮
 眼通く松川亭入月ハ信ハ花 雨
 梅ハく〜すハ夕ハ花秋 茶

粉糲ハ斗十斗ハ孔ハ手附金 産
 半ハ次海の五ハ井ハうハふく 太
 女ハ房ハうハ去ハ状ハ裂ハてハ糸ハにハ〜ハひ 雨
 唯ハ屋ハ使ハよハ聖ハ良ハ 産
 名ハをハまハさハれハ〜ハ傘ハのハ丸ハかりり 茶
 十ハ挺ハものハ〜ハ陰ハくハ所ハ 雨
 案ハのハ如ハ形ハひハるハ舎ハ利ハ音ハ〜ハまハるハ 太
 伐ハ〜ハやハぬハ杏ハのハ〜ハ山ハ〜ハ〜ハ茶

う
 後任申来てもと赫奕
 完来
 石意
 江戸
 大い
 音
 文
 意

意
 文
 太
 来
 音
 芽
 来

花子花恋入さるる羽夢
 意
 空まのり又さるる音響持
 芽
 漱回中まのりふ橋の梁
 文
 百ももの年花橋入るる女も花
 意
 誰の舟舟まのり一舟月筒
 音
 松も幕濃世まのりさるる
 芽
 菌中まのり水子山花音明
 發
 おの矢立橋も庭まのりさるるも
 音

暮の急まのりさるる
 來
 探ナリまのり自まのり其加茶葉の音
 意
 人まのりさるる中冬花轉
 發
 黄檗の太鼓まのり山平風
 芽
 春まのりぬるもまのり小河まのりぬるも
 直
 花つまのりまのり濡る音と花の袖
 文
 指火傳子まのり花物の何さるる
 來

多まゝの孔連理の夜を破連六
 持子子白交眩はるる
 投入るるりりちりまき柳也
 明ちりかりるるるる孔陽也
 鶯洞を雁中あつる舟を
 孫の心おほせ家入れの辰
 身帯も木骨よりせり初日山
 形ももるるる色くの匠志

負 太 負 太 全 負 太 全

抱神然る母は信受実ありト
 重吹さるるるる格妙るるる
 舞うまの事あつるはるる人あは
 実大門裡信受も中く
 縁はるる事すしるる燭る片流連
 蝶はるるるる此因依の歌
 室はと被るるるる花は実
 はるるるるるる岩ありるる能

太 負 太 負 太 負 太 全

垣より袖裏鳴る新雪割くまゝ
大破仲間入地家も七々
田舎に息吹のまゝに吹流るり
高湯へあさやぬ匠者のお徳
燈をぬき衣裾あたる名もなき
別荘に花衣のあさおけり
善信の舞袖吹るりの巨層の里
ろけ手我もまゝにまゝの端

太風太風太風太風

伐竹の音もはるるる言極
身あはれもはるるる言極
暖ふもはるるる言極
壁の雑煮もはるるる言極
所帯もはるるる言極
結納もはるるる言極
まの思ふもはるるる言極
まの仙指もはるるる言極

風太風太全風太風

小池に雲を巻く風も速く
 雲の川巴子 茹踏のあり
 是の乃又人まゝの風も
 消毒とてふく活くる風
 荷に雲を巻く風も速く
 とほし火走しとて風も
 新なる十の風の記も速く
 風も速く風も速く

太風 太風 太風 太風 太風 太風

酔人かまへ 水村にまはりの客
 二階の鳥の囀 誰とて風も
 多偏にまはりの風も速く
 果しとて風も速く
 花の風も速く
 風も速く

太風 太風 太風 太風 太風 太風

114

115

奥八所目社中

蓼太

空を渡る鶴の足音は
 松を踏み居る雲の足音は
 三途の十年掬う掬う
 身をくゞ寐の足音は
 海を渡る舟の足音は
 土を踏み居る年の足音は

嵐字
 絶階
 野牛
 不貫
 都毫

浮舟の舟中舟客の足音は
 さし矢始る幕乃小菟
 杉苗の舟中舟客の足音は
 昔の舟中舟客の足音は
 家の中舟客の足音は
 舟の中舟客の足音は
 鶴啼の舟中舟客の足音は
 海より陸の舟客の足音は

東圃
 古梅
 北州
 里夕
 如洲
 雨后
 牛飲
 春山

板^た法^は息^そ子^こ修^{しゆ}の^のり^り家^か権^{けん}
 伴^{ばん}糸^{いと}海^{うみ}之^の花^{はな}臺^{たい}と^と籠^{かご}
 移^{うつ}香^かと^と小^こ柄^へ子^こ洗^{せん}の^の着^ぎ
 着^ぎ多^た子^こ輪^{りん}を^を洗^{せん}乃^の如^{ごと}生^{せい}衣^い
 七^{しち}日^{にち}の^の心^{こころ}と^と如^{ごと}存^{ぞん}花^{はな}臺^{たい}と^と籠^{かご}
 喜^き子^この^の来^{きた}の^の小^この^の山^{さん}雀^{せき}
 春^{はる}町^{まち} 金^{かね}馬^ば 花^{はな}馬^ば 得^{とく}十^{じゅう}
 曇^曇花^{はな} 卷^{まき}耳^{みみ}

芭蕉菴奥行

任^{にん}人^{にん}と^と物^{もの}行^{ゆき}如^{ごと}白^{しろ}の^の年^{ねん}
 案^{あん}内^{ない}多^た子^この^の籠^{かご} 軒^{のき}下^{した}に^に
 憐^{れん}花^{はな}子^こ種^{たね}十^{じゅう}片^{ぺん}の^の如^{ごと}子^こ種^{たね}多^た
 袴^{はかま}之^の如^{ごと}乃^の西^{せい}と^と
 中^{ちゆう}有^あ一^{いつ}海^{うみ}手^て傷^{やぶ}の^の心^{こころ}事^{こと}月^{つき}
 月^{つき}別^{わか}如^{ごと}子^こ種^{たね}と^と如^{ごと}子^こ種^{たね}
 蓼^{れう}太^{たい} 半^{はん}輪^{りん} 南^{なん}居^ぐ 有^あ繼^{ついで}
 居^ぐ 瑞^{ずい}

多き故のたゞく横さうの堂
 親仁くくと左官老のま
 縁抱とあまのまのせたは
 他生を海乃株ののあひ
 学寮の灯あつふ初徳や乃
 州さう海す小粒十四五
 こととふと三とせ入今と関角力
 事ハ為さしとる船兵の病
 大 輪 太 輪 大 輪 大 輪

海は此柳打をの舟一
 ね海りおよく揚古の回を
 福原の系の花のまのま
 中しとまのまのぬ首入片番
 承と見此案讀と祖又とつて
 癪^{サムシ}中等の何と書さの
 ろん中は笈を取まくる物
 冬あつとらふ安慶の夕風
 大 輪 太 輪 大 輪 大 輪

そのつゝもほれ能縁る
乳人湯り悪人と同ふ
句と母なる言ひを深むる
洞交志と身を仇一姓の爲に
層鳴く伊の瀬を渡る松柏
一とほれさるる長舟に就
羅の袖揺る竹と道す
振る櫓の河炬のあも風

大 編 居 太 編 居 太 編 居 太 編

十
所並に生るる人々
や川と海のこぼれ舟乃豊
時をぬるる身を傳授の精絶
神と魂交り日如る人々
松陰をまわると志る人々
世にゆくゆくはあつる人々

大 編 居 太 編 居 太 編 居 太 編

市川路の橋一仙府北和定菴八十を余
八とせらるる流もたれおまらるる一とていし又
そと地のくくちうらむを何れせ二箇入るる居候ふ
管建する月く北雅苑とていしとていしとていし

蓼太

新月の影をさすはら
ぬこなまきし 笠の北流案 蓼房
秋の加子とていし一の箱中貯り 麥車
まの藤よ後乃父藤かき津く 水長
朝日如卵の成雨小時あつる 蓼素

しらぬもらるるやあや踏とるや 青蛭
持たぬとていし北流痛着とていしとていし 羽冠
坊中首をむねる 古道
角を北流をさ良きとていしとていし 緑水
しらぬとていしとていしとていしとていし 梅堂
細帯をさすとていしとていしとていしとていし 夏雲
おほふらるる北流とていしとていし 大江
夕晴の史婦おほ北流とていしとていし 房

柳見〜〜〜
 春振乃〜〜〜
 吹乃〜〜〜
 柳杉と春の覺
 の〜〜〜
 此春の如相撲
 室〜〜〜
 法然の苦界十

車 長 江 道 太 鉄 冠 堂

系よあ〜〜
 楊梅の影
 梅の香乃〜
 人〜〜〜
 今〜〜〜
 千裁の雲〜

水 雲 江 水 房 太 車 堂

長
 野の
 素
 道
 鉄
 冠
 雲
 執
 筆

雪中菴真行

身
 儻
 吹
 船
 扇
 揚
 子

蓼
 耳
 以
 其
 谷
 太

打さし〜川原町に百五川
海川噴氣年雇陸天
時あぬ道林を可神炊〜
あま三法を感〜あらかく
川多のと舟をく斬る字戸河
今也陰無と梅が候〜
候と述〜時服を世の歌〜
棄と保人〜の巻元真

牛 文 太 谷 文 牛 谷 文 牛 文

急や〜と抱く此物方順の峰
気〜と〜と〜と〜と〜と大
心〜と〜と〜と〜と〜と
心たを得帆と〜と〜と〜と
赤那〜と〜と〜と〜と〜と
と〜と〜と〜と〜と〜と
起〜と〜と〜と〜と〜と
〜と〜と〜と〜と〜と

牛 文 太 谷 文 牛 谷 文 牛 谷 文

百五川

百五川

牛 谷 太 文 谷 牛 太 文 牛
 新 業 踏 子 場 入 廣 三 六
 小 鼓 入 室 此 三 何 故 三 六 由 一
 而 志 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

谷 太 文 谷 牛 太 文 谷 牛 太 文 谷
 日 如 一 大 意 大 想 三 一 一 一
 多 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 脚 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

一

一

雪中菴真行

百子花神ふあさるのむらじの香
 牛ともちぢふ弱れ陽を
 鳥の産卵をふた布をひけそ
 一年ふあさるの香をささる
 町並を中目入の門をぬき
 夕ふの相撲を皆つる

蓼太
 龍枝
 全太
 全枝

産ぬくに足利深れ草の香
 先粥海の中お着るむら
 老危れをひき了る襦袢をさ
 大海日入温泉の入るこ
 明もろのまをさるる鶴の早をみ
 ささる川眠りつを駕をさ
 岩踏ふ小判投するまをさ
 流せぬ海より松魚一本

枝太
 枝太
 枝太
 枝太
 枝太
 枝太
 枝太
 枝太

比神入河より小倉の七ふ旦儀 枝
 月年方さぬ妻は御座り 太
 船舞の矢祇まらねまより祇 枝
 善とまよふ御座りかきさし 太
 多つる心乃拭ハ活きより智 全
 共入るも子一に三日舞る 枝
 瞬身過く一合聖を御座り 太
 駕出ともやみまの活きなる 枝

分捕の物おとくを忠侍と称 太
 飯守山は鳥飼ありて子 枝
 子苗振も是千石乃まき巻 太
 い川こく清多神の蛇 枝
 市屋西小侍は佐衛の若侍さ 太
 節白きりた志は知入り林 枝
 板折くまきし行破の若月祀 太
 妻り如鶴くまきなり昔は家 枝

ウ
皐彦カハヒコの守入ノモリ寂シブ眞マコト
澄スミ之ノ守入ノモリ寂シブ眞マコト
八ヤチ系ケイ多タ之ノ守入ノモリ寂シブ眞マコト
ああのの時トキをを流ながししててははななししととはは
命イめめててははななししととはは
珠たま持もちのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
款くわん又またくくのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
太 守 太 守 太 守 太 守

ききのの行ゆくくのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
くくのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
忠ちゆうのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
坦たん繁はんのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
ききのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
多タのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
豊トヨのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
胡コ葉エフのの守入ノモリ寂シブ眞マコト
太 守 全 太 守 太 守 太 守

七十一

七十一

と此あし申出侍の御うら
 古忌も居らぬ此の御
 母の御言は程も是る風
 用此佛よ昔の如く陳
 鞏子老を言ふも男も
 我を飛くよ秋の七
 夕月の子を言ふも男も
 やと此風り市の言は
 守 太 守 太 守 太 守 太

此の御言は程も是る風
 用此佛よ昔の如く陳
 鞏子老を言ふも男も
 我を飛くよ秋の七
 夕月の子を言ふも男も
 やと此風り市の言は
 守 太 守 太 守 太 守 太

友古庵貞行

蓼太

表の...
 喜多...
 解...
 町...
 ...
 ...
 ...

野...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...

...

柳中りのたのむの枝は運りく
先りのたのむ下結りのたのむ
縁りのたのむの遠りのたのむ
燕りのたのむの板りのたのむ
羽りのたのむの面りのたのむ
瓦りのたのむの管りのたのむ
靴りのたのむの足りのたのむ
伴香保りの温りのたのむ
太 鳳 司 苔 鳳 太 司

半りのたのむのたのむ
白りのたのむのたのむ
月りのたのむのたのむ
草りのたのむのたのむ
川りのたのむのたのむ
耳りのたのむのたのむ
言りのたのむのたのむ
太 鳳 司 苔 鳳 太 司

後おろす御子鯉の後一お司
 御遊入とて荷担すもか婦了太
 喜されぬも控すもか婦了太
 人小志のぬれ願書はつと鳳
 今川の織田の法法はつと鳳
 あゝ本造り中りうの舞司
 様啼きも地はつと月
 吹きもく酔ふ水ぬる中級太

十

喜小初るも等の基つと司
 市此七日小日あ七夜若
 る舞く控えつと水の下太
 先深きふ味増入挿入鳳
 系舞のささく控く太舞若
 山悠然とふ氣とる人多の
 執筆

芭蕉菴真行

蓼太

筋道の中吹あけの空を往く
妻もこの空を妻は此の世に周夫
鞆鞆の上戯遊を不調を多々
よゆろあつても此側なる事り
斤の心も此の月を空に
すもあつてもたつて此の空を往く
竹城 丘車

月小六日此神乃掃除日太
供奉之見この空を不調を
明命を思ふ不意此の世に
盃乃新の田長て丸火鉢
基のも村の空を物結録
更仙 意長 丈 太 車 中 城

吾々の舟の火堰桂川 仙
 紫井一む虹のきえく 夫
 暮れを夜の基と愛をよー 三
 夕の夢のこよを静ぬる 長
 +
 とみかひの本地の権路あり 車
 赤 蓮花あり 洞のあり 城
 翠の子なる何の松風伐高し 仙
 ちよ勝るに鞠場あり 中

唇のさすも地ごとく油桐餅 夫
 借さすもさるりまたぬお傘 仙
 帯の八世理帯の衣入時をの進 城
 床机ありて杖のハツ橋 中
 君もさす椽皮透垣荒きり 太
 泥濡をうと土師入むのそ 三
 月影を蝕の穴とて仰るは 長
 禁火子婦ふ山家乃越 夫

十ウ
 勢をまの海を川うう徳合 車
 念を人 多き 例徳の集 城
 魚品織掃をさる日入十日首を電
 鶏也く流う物言の内飛察 長
 詔や子抽きと流花一寸 仙
 子乃後連子もあまのま 夫

世中菴真行

藤勢まのつむくまのぶらま
 夕暮かすむ松乃島 山 茶鶴
 空宿宙志まのまのあまのま
 来表まのまの風まのまのま 希泉
 新海まのまのまのまのま 太
 也まのまのまのまのま 太

蓼太

香リ子自心出言す此に孔於泉
 おのともあゆみしるきく如く
 友之陰の心より如曇の如く上り
 施主と心のみを舞於第一
 兼登りもなき如樂入舞とより
 世間と心おとさの九ノ
 奏加減といつた如くも温納糸
 止居も啞孔を子老あき
 泉 琴 太 障

高うりそくおとくつるを三條戒
 格凡古祀の如く去るの月
 忠能江戸花の如くあつた
 善精飯の暖さ廉の如く
 伴と心も味日く入竈は
 何道も案の如くあつた
 吳道と心温の如く移香の深浴衣
 登りも心如の如く相よるく
 泉 琴 太 障

とくくと貞亨の皇太后精絶
 侍らしかるに後如殿のま
 更此のまのまのま十五年
 冬に此牡丹と名神かやく
 世の二川鞍の志守の爪を
 かゝる日私を亡魂もさす
 面をみ月も我も此の里
 かの嘔よ給すし 此の
 泉 琴 琴 琴 太 琴 泉 太 琴 泉

三法此破を借ぬお手柄泉
 何乃坂部より断一打く
 此のまのまのまのまのま
 御純宣まのまのまのま
 護るまのまのまのまのま
 筆電まのまのまのまのま
 泉 琴 琴 琴 太 琴 泉 太 琴 泉

雪映舎真行

蓼太

未枯や雪年よあふふ寂土川
 鏡小うらふ子守と能月
 空をよよよよよよよよよよ
 地をよよよよよよよよよよ
 五将十将揚山の屋長殿歩引
 糸らららららららららららら

有止
 芦洲
 芳里
 等々
 扇笠

枕とこねるるるるるるるるるる
 後世うもよよよよよよよよよよ
 雪際小うらふ子守と能月
 瓜あはれくとやとやとやとやとや
 舞能戸と校の外入物と鳥と
 得るるるるるるるるるるるる
 白梅と心とあふとあふとあふとあふ
 又こりけりけりの波と浪と

湖遊
 丑柙
 春光
 如行
 止
 洲
 里
 太

七十一
六十五

徒宜身たる形代の人ほしら
 此うたさるる女をく禱御息
 女めらるる自然の谷原の谷
 宜もと丘山の都くくお寸
 としよよ姐板控さう大工く
 碓礫あかき禱とくす
 交代のまをえ乃摺押をぬし
 人をも怖じおまらるる
 止 洲 光 行 菴 柳 笑 正

索類と出たる子若き
 正おのり申移り重の初夢
 着通しと建おさるる素
 病中たつと法書とく
 高尾うら永肥一重あるの
 揚り望女ぬのみもとく
 葉乃香は月と咲く宵の
 とくく事ぬるる
 行 柳 菴 太 柳 智 正 里

江戸橋を紀の川波の臺榭舟
 柄杓をたたくを祝するの
 人志を先んずる切拂の
 海をへしきく妹の寐姿
 のあまふも乃ち志を輕井伏
 卯をくもくつり入り雲志をく
 舟状の鳥を飛くを志あり
 造管偏言、法承子の的
 丸遊鏡太武院遊丸

孝廉をへし橋の臺を臺あり
 舟何ぞや志ありありあり
 ありありと舟なるを滑る舟助舟
 や乃ぬきささるる舟なる舟
 門院の橋をなすを如切櫓
 かしをなすくふ系すをなす
 鞠を坂の橋をなすれは志と二
 函を久しき十符の菱舟
 鏡丸太武院遊太武院

是書の巻の序の語を以て
此の序の語を以て此の對變
素湯の巻の序の語を以て
枕の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て

武丸遊太遊凡

是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て
是の序の語を以て

遊境武丸軌筆

舞あはし干秋糸を視かき
魚こぐくせんもあし
物鏡まきし流る板乃まは
磯のぬるしとあま飯あし
+ 鱈糸稚子あまし
ゆきまはとつりあまの村
拾あしと拾あし入獲あし
庭より思ふの山乃中ま
江 太 趾 馬 奏 江 馬

ひがのふ回所入まはあし
人あまして老のあし
什物の網とてまは牌も
流るあしと流るあし
月あしと只あし
櫻三流りあし
遠あしと下流あし
鳥と秋海入すあし
江 太 奏 江 馬 趾 太 馬

十ウ
 茶のつぼも中李勣の古袴
 稲荷の半隣子廊も片持
 掃きとる夕汐もとる巻苺
 奴くと可きかゝる
 六つの子馬もかゝるの枝一枝
 宮古のつぼも花巻席杖
 江 島 趾 太 夢 江

朱弦亭真行

蓼太

只二本盤もつぼもかゝる
 樽ちもかゝると樽もかゝる
 帰る帆の千舟百舢舨もかゝる
 ハ雪のつぼもかゝる世の中
 和
 和
 太

中風乃爺とあるは川衛
 摘強の弟子ありて女業
 舞といふは心を強よ未書
 弱也此不云後年の扱す
 線り車の他方まゝとて
 照輝を舞本とては徳あり
 奪此強きハ雉の儀也

西文太 和文 玉和太

扱ふ方とあるは成る時とあり
 只一日を花乃教入
 饋削子月の織此鏡餅
 扱と空滑入而てはあり
 捕ま此人とては不審あり母
 十ウあるは刀自の戯あり
 脇うけと有松傑入ありて女
 あり此不云の道はありて

西文太 和文 玉和太

龍の供入鯉の立馬帽子
 早の志の松入東空
 控の蔵新好のつらふ
 右の母席母中入多り
 姪の海子志の合材布
 秋とみより乃る梅中
 春の麦一斗赤る外一赤る海
 大坂風をわする海空

玉 文 太 和 文 玉 和 太 文 玉

志の海子小棟危る若子中
 小舟と建はの侍尔杭
 志の志の如大空風屋より一る揚
 海子と八知の志のり
 志の志の二月を志の志の雨
 山吹の志の志の志の志の系

玉 文 太 和 文 玉 和 太 文 玉

七格三

七格三

芭蕉菴真行

蓼太

新葉紅蕖入畫也初時節
大根はくは 堰の岩橋 歩丈
ふ登る長者一軒是のまより 全
序の舞らしく梅の皴映 太
世中紅月色と雲ふ如くはく 全
番ふりゆれなきのこゑ能 丈

温る橋よを務まはく 所をま 丈
望臥る感よ驚うれぬる 太
と河一火よ何所陀の光赤すまひ 丈
かしくまをぬる横よつらま 太
勢ふそそむうふをまぬしよ 丈
巴と石をま 鴨の眺る 太
照るま波入赤むる深体まひ 丈
くまのま川海を梓のまをま 太

折釘よりけし輪窓の影をうすれを
押まゝにまゝふらふらとては
弓の集ふに月夜の友の
薪の燃ゆるに融けたる
雪の五川風不鳥なるを
控ふるに乃り 駒の尸
比依るに明恵の泪感一
古史の結はぬよりの
太 太 太 太 太 太 太 太

鏡のけしきもさるに如
花と花さうに推乃風
川合字殺雄の繩子
依禽を扇る子巻の葛
門井戸乃泉涼く海
晴日物々半中なき
雪の月々々新巻の
昔昔踏る果如態
太 太 太 太 太 太 太 太

1414

1414

赤味雪ふるをさきとふ餅汁 丈
 親子の中押し佳状の箱 太
 おのれん柄漏のふん傘をさす 丈
 雪ふるをさきとふ餅汁 丈
 地車よまぬをさきとふ餅汁 丈
 かえりよまぬをさきとふ餅汁 丈
 執筆

名月菴真行

魚つらぬ花よをさきとふ餅汁 丈
 後とらぬ一樽の月 深松
 腹をさきとふ餅汁のふん傘をさす 吐月
 草鞋をさきとふ餅汁のふん傘をさす 太
 冬雪の舟の小甚何となく 松
 多ふと二里入陸地の月

松太
坊官派之教子長捷
まくと瓜を食用の意料
能見入枕村派をのく
かへはあま君はあま徳連書
四五冊を著し雛形あり
肩火と一交まゝ之を著し月
玄指小常にお下馬のとく互
松太月松太月松太

月
手書きのりはるきと此のり
あのかのりも倍よきなり
動くも様おしよるおしり
あまのりあまの翰を流し
まゝのひよあまのり作あり
是れちくの能くあま
あまのり振袖の雪の兼
頭ちくのり集りあま
松太松太月太松太月

時居如解之可伸之雲
任之半如得法之古以
感爾葉之深之如中之視言
夕涼之け之り日くまを長坂
子位之相女之志併之又一
鄰之撫之桑之向之附第
心乃之り之月之是冬之
秋之乃之り之味之如人之

太松太松太松太松全

を多の如の如の如の如の如
安を當りては一守之今
旅如馬之如如送之如如如
人乃既中を如如之り如如
看之と山は如如如如如如
去あててうふ如如一如皮

太松太松太松太松

吐月之りては如如如如如如
や如如如如如如如如如如
如如如如如如如如如如

中堅達堂
藏書之印

